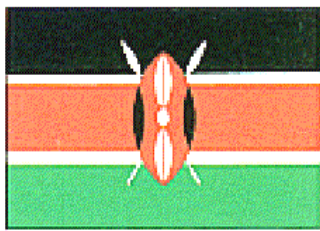


# 帰国報告

# たくましくゆたかに大地を吹く風となれ



～ナイロビ日本人学校での実践～



前ケニアナイロビ日本人学校 教諭  
現根室管内標津町立標津中学校 教諭 飯田 雄士

## 1. はじめに

平成17年度から19年度までの3年間、東アフリカケニアの首都にある、ナイロビ日本人学校に勤務させていただきました。

家族は治安・衛生面を心配していたが、「住んでみたい国」の上位にあったケニアへの派遣に、私の胸は踊った。陸上中長距離選手だった私は、学生時代からケニアのランナーと関わる機会があり、興味と尊敬の念を抱いたからである。

平成17年1月24日より7日間行われた内定者等研修会で、ナイロビへの同期派遣教員3名と国際交流ディレクターの4名と出会った。彼らとは、20年3月21日に文部科学省庁舎前で「またどこかで」と握手をして別れるまで、児童生徒数減少にあえいでいたナイロビ日本人学校のために、アイデアを出し合い、時には喧嘩腰で議論を交わした。

ケニアから様々なことを感じ、ケニアに住む人々からは多くのことを学んだが、それ以上に、「未来を担う子どもたちに、どのような教育を施していくか」について、全国から集まった派遣教員と真剣に考え、全力で取り組んだことが、私にとっては大きな財産となっている。



厳しい財政事情の中、貴重な3年間を与えて下さった国や北海道に感謝し、以下報告させていただきます。

## 2. 現地の様子

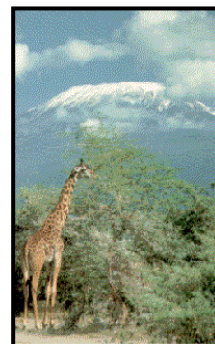
### ① ケニアのアウトライン

ケニアの面積は日本の約1.6倍、人口約3190万人(2003年)で42の部族が存在し(キクユ族21%、ルオー族13%)、インド系ケニア人も多い。1%はヨーロッパ、中国を中心とした外国人で、在留邦人は平成19年9月現在625名である。公用語は英語だが、日常会話はスワヒリ語や部族語で交わされることが多い。宗教はキリスト教25%、イスラム教6%で、大部分は伝統的宗教である。主産業は農業(紅茶、コーヒー、花卉栽培)と観光。時差は、日本より6時間遅れである。

首都ナイロビは、人口約300万人、近代的ビルが立ち並ぶ大都市である。市中心部(タウン)



には、背広姿のビジネスマン、カラフルな衣装の女性が闊歩しているが、一步郊外に出れば、ライオンやキリン等の野生動物が棲む広大なナショナルパークが広がっている。



ケニアは赤道上に位置するが、ナイロビは海拔約1700mの高地にあるため年間平均気温は約18度と過ごしやすい。市内は緑が多く、



色とりどりの花が一年中咲き乱れ、9月から11月初旬にかけては、ジャカランダの花が高く青い空と太陽の下で紫色に輝く。

## ② ケニアの教育事情

ケニアはもともと部族社会で、人々はそれぞれの部族の習慣に従って生きてきた。農耕部族も放牧部族も半農半牧部族も、それぞれが独自の伝統と生活を守ってきた。

しかし、イギリスからの独立(1963年)後、ケニアの初代大統領ジョモ・ケニヤッタが「今後は教育がケニアの将来を決める」と教育の普及に力を入れたことにより「自分たちは学校に行けなかったけれども、どんなことをしてでも、子どもにだけは十分な教育を受けさせたい」という教育に対する思いが高まった。その結果、教育に必要な現金を得るために、職を探しに農村から都会へと人々が流れ始め、スラムがさらに拡大していった。(現在ナイロビのキベラスラムは、人口80万と言われ、南アフリカのソエトに続き、世界第二の規模である。)

ケニアの公教育は、1989年から8・4・4制となっており、新学期は1月から始まる。

小学校(Primary School 全国に約16000校)の8年間は、2003年より無償となったが、制服代や施設費、寄付などの経費がかかり、実際に卒業できるのは経済的理由から76%程度(2004年)で、2007年のユネスコ発表では、100万人の子どもが学校に通っていない状況にあるという。

中等学校(Secondary School 全国に約2700校)は有料で、小学校卒業時に国が行う入学資格試験(KCPE 7科目)に合格しなければならない。

大学(University)の学費は国公立大(全国に10校)では国が一部負担。セカンダリー卒業時にKCSE(8科目)という国家試験を受け、その成績が次の段階への入学資格を兼ねる。

なお、KCPE、KCSEの個人上位者及び学校別平均点はすべて新聞に掲載される。

この他、各種専門学校も全国に700校ほどあり、技術や教員の資格を得られる。

## ③ ケニアの治安状況

かつて「東アフリカの優等生」と言われていたケニアだが、独立後45年が経過し、高い失業率、物価の高騰、近隣諸国の政情不安などの影響を受けて、治安は年々悪化の傾向にある。特に、市内中心部では、拳銃を使った強盗・カージャック・ひったくりなどが頻繁に発生している。2006年のデータでは、殺人が1481件で、人口10万人あたり日本の4.18倍。強盗は5234件で、同3.77倍である。

銃器は、隣国ソマリア、エチオピア、ウガンダから流入しており、国境は警備されているものの、警察官に賄賂を渡せば容易にケニア国内に持ち込める。

平成7年8月には、当時の日本人学校長が出勤時に校門ゲートで強盗に遭って生命を奪われ、それ以降も数名の日本人学校職員が、強盗やカージャックの被害に遭っている。



銃とCDラジカセとバッグを持って逃げる強盗犯。この後警察に射殺された

交通事故も多い。ケニアではマタトゥと呼ばれる小型乗り合いタクシーが庶民の足となっているが、客の奪い合いから無謀な運転が目立ち、法定点検制度もないために整備不良の車が多い。人口当たりの交通事故死者数は日本の1.6倍であるが、車両保有台数は日本の70分の1であることを考えると、交通死亡事故が発生する確率ははるかに高いと言える。



歩道を走り、私の車に突っ込んできたマタトゥ(日本製の中古バン)。ブレーキが壊れていた。

#### ④ 大統領選挙の混乱

1963年のケニア独立以来、三代目となるムワイ・キバキ大統領が就任してから5年が経過し、2007年12月27日に大統領選挙・国会議員選挙が行われた。キバキ政権が誕生してから、小学校8年間は無償となり、国内の経済は確実に成長した。ところが、その恩恵を受けているのは、キバキ大統領の出身であり国内最多数民族であるキクユ族を中心とした中堅層以上の人々、そしてインド系ケニア人であると、多くのケニア人は主張する。失業率は依然として50%を越えており、UNESCOの発表では、無償化した小学校にすら通えない子どもが100万人いるとされている。また、相変わらず公職にあたる人々の汚職も多い。

そんな現状に不満を持った人々が団結して作った政党がODMである。今回の大統領選挙は、現職キバキ（PNU）と、ODMのリーダーであるルオー族出身のライラ・オディンガとの一騎打ちが予想されていた。新聞社が行った事前アンケートではODMが一步リード。しかしODM支持者には「きっと票数を操作される」という懸念が強かった。

投票は12月27日の17:00をもって比較的平和に終わった。翌日28日選挙速報では、ライラが現職キバキの約1.4倍の票を得て大幅にリード。国会議員選挙でもODMが99議席に対して、PNUはわずか37議席。しかもキバキ現大統領を支えた副大統領も落選し、ODMの圧勝かと思われた。

ところが、29日になってから、発表の度にキバキの獲得率が上がりライラを急追。不安を抱いたODM支持者が、昼前から各地で抗議行動を起こし始め、私の家の近くでも物が燃やされ、座り込み抗議で道路は閉鎖。警察との小競り合いが起こった。午後にキバキの票が



さらにライラに近づくと、ODM支持者が多い地区を中心に暴動が発生。車や家に火を付け、スーパーを襲い、無法地帯と化したケニア第3の街キスムタウンをはじめ、厳重警戒を発令する地域が一気に増えた。最終結果は30日17時過ぎに発表となり、僅差でキバキが逆転勝利。発表の1時間後に異例の早さで大統領就任式を強行。報道規制が布かれてTVでは「生放送」ができなくなった。



その後、政治的集会を計画するODM支持者と警察が各地で衝突。2008年1月1日には、キクユ族の女性や子ども、障害者が避難していた教会が燃やされて30人以上が亡くなり、カレンジン族とキクユ族の土地問題が再燃。政治的対立から民族対立に発展していった。1月3日には、私が住んでいる住宅付近でも、ガソリンスタンド付帯ストアや道沿いの野菜売り場が襲われ、銃声が響き渡った。ケニア国内での選挙後の混乱による死者は1000人以上、家を失った避難民は一時30万人に達した。

日本人学校は1週間以上臨時休校を余儀なくされ、予定していた修学旅行やキャンプ学習、職業体験も中止となった。また、家族を日本に帰国させる企業が出始め、児童生徒数が一時10名程度減少した。

平和的解決を目指しての調停は、国内の司教ら著名人ではうまくいかず、最終的に元国連事務総長のコフィ・アナン氏に委ねられた。そして2月29日、新たに首相（Prime Minister）ポストを設けてパワースェアリングすることで合意し、ODMのライラが初代首相ポストに就くことで2ヶ月に及んだ混乱に、形の上では終止符が打たれた。しかし、一度火を付けてしまった民族間の対立感情は収まりそうになく、今後も不安定な状況が続くことが予想される。

### 3. ナイロビ日本人学校の様子

#### ① 概要

たくさんのケニア人が颯爽と歩く高級住宅地を抜けると、真っ白な雲が浮かぶ高く蒼い空が目の前に広がる。大雨季（3～5月）には路肩に川が出来、乾期（7～8月）になると牛と山羊を追う赤い布をはおったマサイ族が多く見られる。そんな風景の中を、児童生徒たちは、カージャック対策の警備車が先導して、防弾ガラスを装備した2台のスクールバス（日本人添乗員付き）に分乗して登校してくる。野生の王国ケニアにあるナイロビ日本人学校は、7名のガードマンと警備犬、ブーゲンビリアの棘と有刺鉄線を巻いた鉄柵に守られ、校訓「たくましく豊かに大地を吹く風となれ」の下、子どもたちは切磋琢磨の毎日を送っている。2008年で創立39年目を迎えた。



野外学習場



緑に囲まれたグラウンド



スクールバス

1970年に「大使館付属」として児童生徒4名、教員2名で開校した本校は、昭和62年には110名に達したが、ナイロビの治安悪化、バブル崩壊後の不況等のあおりを受けて減少。さらに、英語教育熱の高まりと共にインター校に通わせるケースが増え、2006年時点で在ケニア日本国大使館へ届いている邦人小中学生登録者数70数名中、32名が日本人学校に籍を置くに止まっていた。9学年に対して派遣は、校長、教頭、ディレクター、8名の教諭であった。



#### ② 教育課程の大幅な見直し

ナイロビ在住邦人小中学生の半数以上がインター校などへ通うという状況の中、それらの学校との競争に負けることなく児童生徒を確保するために、魅力ある教育課程の編成が急務であった。在留邦人にとって、日本人学校よりもインター校に通う方が魅力的であるのなら、これほど多くの予算を費やして日本人学校を存続させる意味はなくなってしまうからである。

児童生徒数27名にまで減少することが確実となった2005年12月、私は教育課程編成委員長となり、2006年度、2007年度の2年間、教務主任を務めることになった。

まず17年度までの教育活動を反省し、教職員全員で、「どのような子どもを育てたいか」を話し合い、下記のようにまとまった。

「知・徳・体」のバランスがとれた成長を願い、「確かな学力」をつけさせ、「豊かな人間性」を培い、「健康や体力」を養うことで、「自分で生き抜く力」「自分を生かす力」を構築したい。

次に、学校教育活動に関するアンケートで評価が低かった保護者と直接会って話をした。また、日本人学校からインター校に我が子の籍を移した保護者にも連絡を取り、「どんな学校になれば、日本人学校を選択していただけるか」を率直に尋ねてみた。

本校に通わせる家庭は、下記にほぼ3等分される

- ア 帰国後に、いわゆる名門と言われる日本の学校に子どもを入学させたいと考える家庭
- イ 今後も海外で生活し続ける可能性が高く、どの国へ行っても対応できるような力をつけさせたいと考える家庭
- ウ 両親のどちらかがケニア人であり、日本語や日本文化を身につけさせたいと考える家庭

そのため、意見は多岐にわたったが、下記の5つを「保護者の願い」とし、18年度教育課程編成の課題とした。

- (1)日本語（母語）の力は理解力・思考力ばかりでなく、自我形成にも大きな影響を与える。日本人学校はケニアで日本語を学べる唯一の学校であり、徹底的に日本語を身につけさせてほしい。
- (2)少人数の利点を生かし、きめ細かな受験対策指導を行ってほしい。
- (3)子どもたちが、学年に関係なく仲良くなれる場を多く設定してほしい。
- (4)子どもの特技を伸ばせる場を増やしてほしい。
- (5)「成果」が実感できる活動を行い、「成果」を広く発表してほしい。

年が明け、2006年1月より毎週のように教育課程編成委員会が行われた。安全管理上、日没後は学校に残ることを控えていたため、学校長宅で夜遅くまで議論することもあった。帰国予定の教員も、差し入れに頻繁に訪れ、助言をいただいた。

結果的に、限られた予算と教員数で、「やりたくても出来ない」教育活動も多かったが、3月上旬に行われた「18年度教育課程説明会」における保護者からの評価は良好であった。

以下、年度始めに作成し、在ケニア日本国大使館やJICA事務所、日本食レストランなどに置いていただいた「平成18年度学校案内パンフレット」より抜粋する。

★確かな学力をつけるために

●年間授業時間数・・・学校教育法施行規則標準時数の120%を確保します

●国語教育の重点化・・・すべての教科の理解力、思考力はもちろん、アイデンティティ形成にも大きな影響を及ぼすのが母語の力



低学年部読み聞かせ

です。本校では「言葉の力の時間」を開設し、国語教育の重点化により、すべての学習活動に相乗的な効果を生み出します。



高学年部ディベートの様子

- 目標進路を見据えた学習指導・・・学力テストの受験機会を拡大し、小学校5年生以上は必修で3回実施します。希望者には、休日を利用してさらに3回（中3は6回）受験可能です。学力テストのデータをもとに、目標進路実現に向けて、少人数を生かした個別指導を行います。また中学生には週2回（中3はさらに年間35時間）「受験対策の時間」を開設します。

●外国人講師による English 授業

美術・図工科 English イマージョン・・・

小学生は週2時間、中学生は必修英語3時間にプラスして2時間、実践的な英会話ができ、異文化に親しみを感じることをねらいに English の授業を習熟度別を実施しています。中学は日本人教師とのTTにより、受験英語にも対応できるようにしています。また、全学年図工・美術を英語で行うことにより、英会話を生活の中に自然に浸透（イマージョン）させます。



英国人講師による  
図工・美術科の授業



学習発表会での  
English 劇



低学年部の  
English 授業

●A週金曜90分の課外学習講座・・・

苦手科目を克服し、発展的な内容や各種検定試験に挑戦するために、自ら課題を設定し、希望者が学習する時間です。

★豊かな人間性を培うために

●効果的な集団づくり・・・学年・学級の枠にこだわることなく、学習内容に合わせて、最適な集団を柔軟に組織し、教育効果を高めます。生活の基盤は「学年部」とし、小学 1,2 年を低学年部、小学 3,4,5 年を中学年部、小学 6 年と中学 1,2,3 年を高学年部として、中集団による「思い合い」「高め合い」を生み出します。また児童生徒会を中心とした異学年集団活動を展開します。



高学年部の弁当の時間



児童生徒会主催餅つき

●課題解決学習・キャリア教育（Jタイム）

今年度は「環境」を重点テーマとし、課題を見つけ、学び、判断し、工夫しながら主体的に課題を解決する資質や能力を養います。研究成果は 11 月の学習発表会で披露されます。また、しっかりした勤労観の上に望ましい職業観を築くキャリア教育を実施します。



中学年部が  
ゴシカリを収穫



象の孤児院を運営するダニ・シルトリック氏への取材



ユネスコ及び商社で働く「人生の先輩」を招いてのキャリアシンポジウム

●合唱・金管・和太鼓・・・音楽科の授業はもちろん、毎週水曜日に実施される全校集会の中でも合唱練習が行われ、小学 3 年生以上は金管で演奏の表現力を高めます。また日本の伝統文化である和太鼓の制作演奏を行います。



天皇誕生日レセプションで大使公邸にて太鼓演奏



日本人会ふれあい祭りで太鼓演奏を入れたよさこいソランを披露

●国際理解教育（Jタイム）・・・学校間交流ではナイロビにある公立校、インター校、外国人学校と交流します。現地理解教育では、本校独自に作成した社会科副読本を活用し、校外学習を行います。またアフリカについて研究している専門家を招聘し講演会を実施します。



60ヶ国の子どもが通うISK校との交流で柔道、剣道、日本の遊び、書道、折り紙、餅つき等を教えた。



スウェーデン人学校での体験授業交流



英語を第二言語とする外国人学校と文化交流するカルチャーデー



「発掘の第一人者」京大の中務真人氏の講演。三年間で 12 回のアフリカ学習講演会を行った



ノーベル平和賞マータイ氏との植樹

★健康や体力を養うために

●教科体育の充実とスポーツ検定・・・

2時間続きの教科体育を隔週で行い、年間8回の水泳教室をはじめ、質の高い体育活動を可能にします。また、25の運動種目に「段・級」を設定したナイロビ日本人学校スポーツ検定へ、体育の授業ばかりでなく、特別活動の時間等にも挑戦することで、健康や体力を養います。



剣道や少林寺等の「達人」を招いての体育の授業



隣接校のプールを借りて水泳授業。  
平均気温18度のナイロビは寒かった

●「体・技」の教育機会を拡大する課外ジャリブ講座・・・火曜日の放課後3:05~4:35の時間を3期に分け、派遣教員や保護者が、特技を生かして各を活用し、希望者が集まってクラブ活動を行います。各期10回の講座を指導します。体験生や一般の方の参加も可能です。



保護者開設の  
日本舞踊講座



飯田開設の陸上講座



外部講師開設  
のバスケット講座

★ナイロビ日本人学校行事スナップ



児童生徒総会  
毎年工夫をこらした発表が楽しめる



日本大根を栽培し、日本人会ふれあい祭りで販売



学校で行われる1泊2日のキャンプ



ウゴングヒル登山  
広大な草原はまさに絶景



小6と中2で行う修学旅行。標高5000mを超えるケニア山に登る



教員が扮した「おかしな鬼」が現れる節分集会



平成18年度は1人を送り出した中学校卒業式



式の後には教員の私設応援団が登場する。

### ③ 体験生制度の廃止

教育課程の大幅な見直しにより、平成 18 年度の前期学校評価は概ね良好となり、年度始めに 32 名だった児童生徒数は、年度末には 42 名まで増加した。

教職員は常に「日本人学校を選んだ子どもたちを大切に育て、子どもの成長を通して信頼を勝ち取る」ことに全力を注ぎ、多忙な毎日を送っていたが、教員の忙しさをさらに増していたのが、「体験生制度」であった。

元々、ナイロビ郊外に住む日本人の子どもたちを、土曜日に限り受け入れていた制度であったが、しだいに受け入れ範囲が広がり、17 年度は、インター校へ通う日本人の子どもが、在籍する学校の休業日に体験生となるのがほとんどであった。その数は多い時で 15 名。中には、子ども本人が望んでいないにもかかわらず保護者が託児所代わりに利用したり、日本語がままならない低学年児童が、授業の妨げになったりするケースが見られた。また、日本の問題集などを要求してくるケースが見られ、体験生の指導が本校生の教育にマイナスになる状況が続いていた。

そのため、18 年度には、体験生の受け入れ期間を制限したが、それに対する体験生保護者の反発は強く、保護者と派遣教員が意見交換する「体験生制度について考える会」が、学校運営委員会が主催となって二度開かれた。その中で派遣教員全員が「本校を選んでいただいた子どもたちを大切に、責任を持って育てたい。」という思いを伝え、体験生制度による弊害を具体的に説明した。

その結果、体験生制度がさらに縮小されることになり、19 年度からは「本校への入学を迷っており、その判断材料とする目的で 1 週間以内 1 回のみ認める」ことになった。

### ④ 派遣教員専門教科アンバランスへの対応

平成 18 年度後期の学校評価は、「盛りだくさんの教育活動で子どもたちが疲れている」という指摘があったものの、概ね良好で、18 年度の教育課程をわずかに修正し、安定化に向かうものと思われた。

しかし、国の予算カットは予想以上で、校長が帰国した上に、教頭の派遣がなくなってしまった。しかも、管理職 2 人と、国語科、音楽科の派遣教員が帰国したのに、新しく派遣された教員は、新校長と体育科、数学科教員の 3 名（内定者が辞退した可能性が高い）。国語教育の重点化を前面に打ち出し、金管楽器演奏に力を入れてきた本校にとっては、国語、音楽を指導できる教員が来なかったことは深刻な問題であった。

そこで、体育と数学を指導していた私が 6 年生以上の国語を、小学校教員が音楽科を担当することとし、平成 19 年度教育課程編成上の課題は下記の 2 点とした。

18年度の教育課程を大枠で踏襲しながら、さらに教育内容の質の向上を図る。

- 教育活動の整理と時間割の弾力的な運用による効率化
- 学校支援ボランティア、外部講師の積極的導入

毎週の教育課程編成委員会議を経て、教育課程を次のように変更した。

- (1) 週 45 分 2 コマの中学年部の英会話を 30 分 3 コマとし、英語力の定着を図る。
- (2) 午後 90 分の授業を 80 分に短縮し、下校時間を繰り上げる
- (3) 課外学習の時間を割愛し、「裁量」を毎週 45 分実施。各種検定に向けた学習、スワヒリ語講座等の教員設定講座の開設や学力テスト実施の他、外部講師や学校支援ボランティアを積極的に招いて、器楽演奏講座などを開設し、派遣教員の専門教科アンバランスを補っていく。



## ⑤ 国際理解に関するその他の実践

これまでは、教務主任としての実践を紹介したが、その他、教科や学級担任、進路指導担当としての実践をいくつか紹介する。

### (1) 体育科教員として

#### ●近隣インター校とのスポーツ交流

West Nairobi 校とは、男子はサッカー、女子はバスケットボールを行った。第1試合は混合チームで交流し、第2試合は学校対抗で行った。結果はサッカーは負け、バスケットボールが勝利した。

1年間の水泳授業の成果を試す場として、バング校との競泳大会を企画した。当日は子どもも、応援の保護者も勝敗にこだわり、大会終了後には、「日本語で書かれた記録賞」を両校選手全員に手渡した。

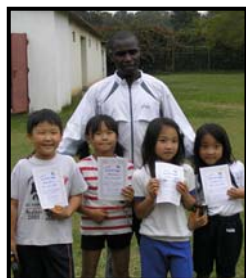
最終種目学校対抗 FREE STYLE

RERAY は、18年度は日本人が校が勝利し、19年度は同着となった。



#### ●元山梨学院大学ステファン・マヤカ氏を招いての持久走記録会の実施

平成19年7月19日に行われた日本人学校持久走記録会に、ケニアに一時帰国中であったステファン・マヤカ氏を招待した。当日は、低学年部の500m, 中学年部の1000m, 高学年部の1500mのすべての種目で児童生徒達を励ましながらかけていただき、総合的な学習の時間で「ケニアランナーの強さ」について研究をしている児童の質問に答えていただいた。



#### ●運動会に現地公立学校児童を招待

ナイロビ日本人学校では、毎年現地公立校である Killimani Primary School を運動会に招き、徒競走、リレー、綱引き、玉入れなど、事前に練習しなくても実施可能な種目の他、当日短時間で練習を行った上で、日本とケニアの子どもがペアとなって二人三脚リレーを行っている。



参加する子は、スポーツが得意な子が選ばれるのではなく、本校の児童生徒の学年、人数に合わせて生活態度が落ち着いている子が選ばれる。陸上種目である徒競走やリレーの状況を見ると、ゴールテープの手前で止まったり、バトンを受け取った後に逆走してしまったりというハプニングはあったものの、例年、低学年の子どもはケニアの子が圧倒的に速く、上級に進むにつれて日本人学校の子どもたちが優位になっていく傾向にある。



これは300万人都市であるナイロビだけであると思うが、学校でのスポーツ活動が盛んでないケニアでは、ランナーとしての優れた素質がありながら、都市型の生活により一般の子供たちの体力は低下していることがうかがえる。



## ●ケニア女子ナショナルチームを招待してのバレーボール教室

東京五輪銅メダリストで、元全日本女子バレー監督、2006年世界バレー（東京）のケニアチーム監督を務めた菅原貞敬さんに、平成18年8月に日本人学校で、ケニアチームを連れてバレー



ー実技講習を行っていた。ナショナルチームであっても練習環境に恵まれない選手達であったが、プレーは迫力があり、日本人学校の子どもたちは目を丸くしていた。

## ●現地の若者を招いてのテコンドー教室

ケニアには韓国人も住んでおり、ナイロビで日韓スポーツ交流を行ったり、日本人会主催のふれあい祭りに韓国人会を招待したりするなど交流があった。しかし、竹島問題が大きく取り上げられ、19年度は交流がいっさいなかったのは残念であった。

ケニアのテコンドー協会会長を務める韓国人の紹介があり、テコンドーを志すケニア人の若者2名に、体育の授業でテコンドー講習会を行ってもらうことにした。

17、18年度に計3回実施したが、教え方も上手く、子どもたちの興味をよく引き出していた。報酬は1回90分で一人1000Ksh（約1700円）であった。



## ●ナイロビマラソンへの出場

世界でもっとも標高が高い地で行われるフルマラソン（42.195km）がナイロビマラソンである。参加費150Ksh（250円）で記念Tシャツをもらえる3km FUN RUNもあり、選手は毎年1万人を超え、ナイロビの一大イベントとして、沿道には多くの観衆が集まる。

2005年度は個人的にフルマラソンを走らせていただいたが、セキュリティ上問題ないと判断して、2006年度は希望する児童生徒、保護者、教職員と「日本人学校チーム」を編成して参加した。フルマラソンでは、ケニア国内レースでの最高記録（高地世界新と言われている）が誕生し、参観した日本人学校児童生徒は、その速さに目を丸くしていた。

2007年度は、女子フルマラソンではまったくの無名選手が優勝。ケニア北部のリフトバレー地区から、1500Ksh（2400円）のバス代を借金してナイロビにやってきて、帰る時には優勝賞金150万Ksh（240万円）を持って帰ってしまった。優れた素材を持つ選手が多く隠れているケニアを象徴する出来事だった。私は、支援している日本人NGO「MOYO CHILDREN CENTER」のチャリティとして42.195kmを完走。1km500Kshなので、21,000Ksh（約36,000円）がストリートチルドレンの支援に使われることになった。



## (2) 国語科教員として

### ●日本語を学ぶナイロビの大学生に

#### 「日本語の素晴らしさ」について授業

ナイロビにある名門大学、ストラスミア大学で日本語講座を受講する60名の学生が、10月に本校を訪問した。

当日はよさこいソーランを披露した後、「言葉の力の時間」の授業に入ってもらい、

日本人学校の子どもたちと、「日本語の素晴らしさ」を出し合った。



子ども達からは下記のような「素晴らしさ」が出たが、私の英語力不足で、大学生に理解していただけただうかは疑問である。

- ひらがな、カタカナ、漢字、数字、ローマ字の5つを使いこなす
- 相手を敬う言葉＝敬語がある
- 一人称の呼び方がたくさんある
- 微妙な気持ちを言葉で表すことができる
- 一つの言語で、国内どこでも通じる
- 地方独特の方言がある
- 助詞が一文字違うだけで、意味が変わる
- 語尾を変えれば、臨機応変に意味を変えることができる
- 季節の変化を繊細に表す言葉が多い
- 5・7音など、リズム感のある読み方ができる
- 「もったいない」など、生き方を示唆する美しい言葉がある
- ことわざや慣用句がたくさんある
- 擬態語や擬声語がたくさんある

## (3) 進路指導担当として

### ●2日間の職業体験学習の実施

ナイロビ日本人学校では、「しっかりした勤労観の上に望ましい職業観を築くキャリア教育」を、9年間通した学習プログラムに従って実施しているが、その中核となる「職業体験」を、現地の事業所で行った。

平成17年度は、中学2年生1名がケニア人経営の高級ホテルに、中学1年3名が日本人が経営する幼稚園（英語）で2日間保育体験を行った。



ホテルは生徒一人の体験であったため、かなり緊張していたが、2日目には多くのホテルスタッフとコミュニケーションがとれるようになっていた。学校

での報告会では、ベットメイキングのやり方をきめ細かく説明し、大きな自信につながったようであった。



幼稚園では、準備していた道具を使って、英語で園児達と上手に遊んでいたが、体験直後はかなり疲労困憊していた。

平成18年度には、小学6年生と中学1年生の9名が、紅茶農園と、マータイ氏が植樹する苗木を育てている森林局に分かれて体験した。両事業所ともに、ていねいに仕事内容を教えていただき、辛さよりも、



様々な業務を広く知る楽しさを味わっていた。



平成19年度は、大統領選挙後の治安悪化により中止となった。

#### (4) 学級担任、学年部担当として

##### ●ナイロビ現地校での体験授業

ケニア公立小学校は 2003 年より原則無償となったが、国家予算が少なく、教室には 50～100 人の子どもがあふれている。そのため、都会では少人数クラスの私立学校に通わせる親が多く、教育費が高くなることから、子どもを多く持たない家庭も出てきている。

平成 19 年 2 月、日本人学校と交流している Killimani Primary School の授業を 2 時間、日本人学校高学年部の児童生徒に体験させた。

写真は、6 年生の数学授業。すでに方程式を学んでいたが、計算問題ができた子は、先生に丸つけをしてもらうために、ずっと手を挙げ続ける。でも 50 人を越えるクラスなので、なかなか教員は来てくれず、参観していた私もノートチェックに回った。ほとんどの子は正解で、間違えた子も理解できるまで私の拙い英語を一生懸命に聞いていた。



##### ●修学旅行でマサイ族の学校と交流

マサイ族は人口 20 万人の遊牧民で、牛糞と泥で塗り固められた家に住み、槍を持って家畜たちを追いながら広大なサバンナで生きている。野生動物に自分の存在を知らせるために、赤い布を身にまとい、ミルクと牛の血を飲み、練粥や果実を食べる。手足は細く長く、ジャンプするには最適な体型で、プライドが高く、勇敢だとと言われる。

平成 17 年度日本人学校の修学旅行は、マサイ族が多く住むアンボセリ国立公園となったため、



学校の外観

マサイの学校との交流を計画した。訪問した学校で 20 歳代の若い校長先生に内諾をいただき、ケニアの教育省に書類を提出して、9 月 22 日に 2 時間の交流が実現することになった。



教室内

当日は、地域の有力者やマサイの長老までが集まり、軍隊式に国旗掲揚を行った後、緊張した雰囲気でおブニングセレモニーが行われた。



穴だけのトイレ

その後は、日本の遊び（コマ、けん玉、凧上げ、折り紙）を教え、日本人学校や日本のことを紹介する映像をパソコンとプロジェクターで教室の壁に映し出した。子どもたちは



初めて大画面で観る映像に驚き、大人達は、機械を不思議そうに見つめていた。

後半は、マサイ族の子どもたちによる歓迎の歌と踊り。ビーズで作られたカラフルな装飾を身につけ、しなやかに、そしてリズムカルに踊りを披露してくれた。



言葉は十分に通じなくても、自然な交流をしている子どもたちに感心させられた 2 時間であった。



最後にサッカーボールをプレゼントした

## 4. おわりに

### ① ストリートチルドレンの支援をするNGO松下氏

ナイロビの北東50kmの町THIKAで、「MOYO Children Center」というNGOを主宰しているのが松下照美氏である。

徳島県の陶芸家であった松下氏は現在63歳。50歳でご主人が交通事故で亡くなってからボランティアとしてウガンダのNGO活動に携わり、そこでストリートチルドレンと出会い、「ストリートの子供たちのために残りの人生を送りたい」と決意し、1996年にケニアに渡った。1999年にはNGOの認可を受けてMCCを開いたが、2000年には過労から脳梗塞で倒れ日本に帰国。それでも「ストリートの子供たち」への思いからリハビリを乗り越え、再びケニアで本格的に活動を再開。現在は、多くの日本人から資金援助を受けているものの、下記のような多様な活動を事実上一人でやっている。

- ★スラムの子供たちへの学費支援
- ★ストリートチルドレンのリハビリ（スポーツ、学習）
- ★孤児や虐待を受けた子供が生活する家の運営
- ★婦人グループ、障害者グループへの少額貸し付け、新規事業へのバックアップ
- ★スラムの小学校支援

初めてお会いした日に、子供たちにシンナーをやめさせるまでの経緯を聞き、スポーツや英数の学習を通したリハビリに参加させていただいたが、「本来受けるべき権利の外にいるケニアの子供たちに最低限の環境を」という熱い思いと、支援のレベルを越えたストリートの子供たちへの深い愛情に強い感銘を受けた。また、実際にスラムへ連れて行っていただき、生活実態を知ることが出来た。



### ② スラムに学校を作ったNGO早川氏

南アフリカのソエトに続く世界2番の大きなスラムがナイロビのキベラスラムである。4~5平方キロの中に住んでいる人は80万人と言われ、国の土地に勝手に建てたトタン屋根の長屋がびっしり詰まっている。長屋には家主がいて、賃料は月750円（土床）~1500円（コンクリート床）。電気の供給はなくランプを使用し、水は道路脇に設置された水道を使うか、業者からタンク入りのものを買っている。せまい未舗装の道ばたにはゴミがあふれ、広場には共同トイレがあるものの、所構わず用を足すため、悪臭が漂う。薬物、アルコール中毒、家庭内暴力、強姦、売春、HIV感染が連鎖し、犯罪者の隠れ家にもなっているので、政府はスラムクリーン策を打ち出していますが、いっこうに進んでないのが現状である。そのキベラスラムに、学校を作る活動（NGO）を展開している日本人が早川千晶氏である。この「スラムのNGO立学校」で、素直な子どもたちは様々な事を吸収していくが、都会のスラムは「外の世界との貧富の差」を感じてしまうので、大人のストレスも大きく、子どもたちは思春期になると心がすさんでしまうことが多いそうである。



### ③ UNEPの大賀氏との会話より

2007年10月、国連事務所を訪れた際、UNEPの大賀氏とこんな話をした。

「何とか日本の子どもたちとケニアをつなげることが出来ませんかねえ」と。そして、「飯田さん、日本でそんな活動をして下さいよ」と言っていただいた。



### ④ まとめ

日本に帰国してから半年。ケニアにいた時には「日本に帰ったらケニアのことをいっぱい話し、ケニアと日本のパイプ役になるんだ」と意気込み、帰国早々の4月14日。前述の松下氏を標津町に招待し、根室管内2校で講話をしていただいたが、そんな初心はどこへやら。日々の生徒指導や次々にやってくる学校行事に追われ、ゆとりのない毎日を送っている。「いったい俺は何をしているんだろう」それが今の正直な気持ちである。

ケニアの歴史は、奴隷制度と植民地支配の長い苦しみの時の流れでもあった。その鎖を断ち切ることが出来ず、今もなお、基本的人権すら享受出来ないでいる多くのケニア人の生活があり、それを「先進国」という眼から差別と偏見で見下ろしている人々がいる。



奴隷市場跡に再現された石像と、奴隷収容室



ケニアの人々の生き方は、シンプルだが線が太い。Polepole ni mwendo. Haraka haraka haina baraka (ゆっくりはかえて歩みが早い。急ぐと神の祝福がない) これは、ケニアのことわざである。ケニアでの生活は日本人の思い通りにはならない。電話が不通になって修理の依頼をしても、「Tomorrow」という返事で1週間はやって来ない。飛行機は平気で5時間も遅れる。ワークパーミットは申請してから取得するまで8ヶ月もかかる。それでもイライラしたりせず、誰とでも笑顔でコミュニケーションをとりながら待ち続ける。Haramubee (相互扶助) も根付いており、困ったときには助け合って生きている。

時々、そんな生活に戻ってみたいくて、古いウエアを着てケニアの道をランニングすると、裸足や革靴で私の横に付いて走る人がすぐに

現れる。突然にわか雨が降れば、せまい屋根付きバス停で楽しそうに雨宿り。ずぶぬれの私をカサに招き入れようとする人もいた。

日本はどうだろう。先進国特有の複雑な社会がストレスを増大させ、精神的なもろさが露呈している。参考書があふれているのに、「先生の教え方がわからない」と不満をもらし、雨が降ると「迎えに来て」と親に命令する。テレビゲームがないと遊べない。「真珠湾攻撃」や「捕鯨問題」も説明できず、外国人から詰問されて「I am sorry.」というだけ。

ナイロビ日本人学校の「学校財団理事長」は、ケニア最大の食品会社「ケニアナッツ」社長の佐藤芳之氏である。従業員4000人、売上高58億円にまで一人で育てあげた会社をケニア人に譲り、69歳の今、豪州や中南米、そして欧州への進出を考えている。

佐藤氏のように、世界を見つめ、世界から学び、世界に発信していけるような日本人を育成したい。今後、世界と子どもたちの間に立ち、Jointする役割を、北海道国際理解研究会の方々と担って行ければ幸いである。



約20kgの水を頭に載せ、両手にバケツを持って川から運ぶ「生活トレーニング」がケニア人に優れた身体軸と体力をつける。ケニアの水道普及率は44%程度。郊外で家に水道があるのは稀である